

村野次郎創刊

香蘭



二〇二六年(令和八年)二月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇三卷第二号

2026年(令和8年)2月号

第103卷

第2号

通卷1142号



香 蘭

2026年(令和8年)2月号
第103巻 第2号 通巻1142号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(126)	小 笹 岐美子	表二
近詠十五首 花の齢	斎 藤 俊 子	2
作 品		4

二	24
三	30
推薦香蘭集	36
香 蘭 集	37

作品一	十首選(十二月号)	桜 井 京 子	16
作品二・三	十首選(十二月号)	渡 辺 礼 比 子	18
村野次郎への旅(190)昭和期の「香 蘭」(二十五)		千々和 久 幸	20
続・酔風船(26)覆された宝石「歌誌「短歌人」の紹介		千々和 久 幸	22
一頁公論(57)正岡子規と鎌倉そして日蓮 続編		塩 田 文 子	23
加瀬喜美江「家路」評(十二月号近詠十五首)		高 畠 憲 子	40
七 首 抄(十二月号)	丸 山 ・ 小 城 ・ 矢 口 ・ 西 崎	中 村 陽 子	41
エッセイ・自由研究 大西民子の短歌と絵画		松 沢 み どり	42
焦 点(十二月号)食に思いを馳せる		丸 山 三 枝 子	44
作 品 評(十二月号)		千々和 久 幸	46

作品一	丸 山 三 枝 子	46
作品二	千々和 久 幸	48
作品三	石 井 雅 子	50
香蘭集	関 口 静 子	52

緑 地 帯	森田徹・小野香代子・朝倉千里	52
他誌拝見	大井田 啓 子	54
明宝研会	川 久 保 百 子	57

『おかえり、いつてらっしゃい』を読む	71
歌会及び会合・会員消息・他	65
編集後記・新宿日記	58
令和八年度 全国大会 申込書、詠草記入用紙、案内等	73
表紙絵……山口蓬春「柚子」	表三
目次・緑地帯カット	和 田 和 雄

小 笹 岐美子

村野次郎作品 私の愛誦歌 (126)

さまざまな思ひ出ありて地に低く

来る光さへかなしきもので

『角筈』

この歌は、第四歌集『角筈』に収められた歌で、昭和五十二年、先生八十三歳の作である。先生は八十五歳で亡くなられたので、最晩年の作と言える。「低いひかり」と題した五首の冒頭に置かれている。

『全歌集を読むと、先生の歌には「ひかり」がよく出てくる。いずれもつよいひかりではなく、静かで穏やかなひかりを感じ、私はフェルメールの絵を思い出す。「光の魔術師」と呼ばれたフェルメールは、ありふれた日常の光景に絶妙な光をあてて、穏やかで静謐な時間を切り取って見せた。先生のひかりの歌にも同じ雰囲気を感じる。人生を振り返った時、先生には低いひかりが穏やかに差している。しみじみと充足した晩年の姿だ。だからこそ五首目に「光満ちつつ豊かなりけり」と歌われたのだろう。十年後、私はこんな心境になれるだろうか、そう思われる一首だ。

よわい
花の齡

斎藤 俊子

何積みて来たるか室蘭ナンバーの大型トラック朝より停まる

たまさかに履きたる靴に不機嫌な足を氣遣い^{いち}一日を終う

人生通りと人ら言う道 葬儀屋に産科、保険屋、薬屋並ぶ

改良の進みてもはや品種などわからぬただの「りんご」を食めり

われからの便りの手書きがうれしいと友は告げたり電話の先に

遠く来てすでに免許は返納と氣付き帰れず 夢で良かった

飛ぶように過ぎゆく日々の厨辺に玉葱青く芽を伸ばしおり

わが膝の青痣いつしか薄くなりまだまだあらんわれの治癒力

しかたなく昇りましたと山の端の今宵の満月赤く濁りて

いつの日のどんぐりならんポケットに一つ残れり行き場をなくし

階段の最後に向う脛を打ち「弁慶だつて」と痛みこらえる

ひと言随想 低くなった視線

どれほどの齒石をとらん響きくる音にたちまち恐れをなせり

片足にスツと立ちいる水鳥を行きずりの人と橋より眺む

晩秋は一夜にして来る昨夜吹きし風が朝の天を高くす

道の辺の花の齡はわからねど膝折りてみる春の陽の下

この地に住み間もなく五十年。かなり変わって来ているが、まだまだ自然が残っている。

もうしばらくはと思っていたが、数年前に車の免許証を返納し、今はバスを利用したり、歩けるところは歩いたりという日々になっている。気付いてみると歩くことにより視線が低くなり、道の辺の草花、小さな石仏、飛んでいる虫などが自然に目に入り、うれしいひと時がある。また、季節の良い時は少し足を

延ばし、広がる畑に育つ諸々の野菜を眺めながら歩いていると、時として自然の中より「歌の種」が来てくれることも大切な収穫として持ち帰る。

時々トラクターに追い越されたりしながら目にする新鮮さが、また、次へと繋がり、いつの間にかスニーカーの底が減っていて驚く。

四 選 者 の 作 品

黄櫨の木

平塚 千々と久幸

思うようにはいかぬものだよねえ百舌よ 黄櫨の木は今も曲がったままで
壁には壁の言い分あらんに表情の見えねば黙って素通りしたり
国滅ぶ日本はろぶという声すいつかも聞いた懐かしき声

友愛と平和は臭いと言うきみが蟹を食らうと一人戦う

自転車タイヤに空気を入れている男が時折空を見上ぐる

浮き沈みするあなたとの記憶なれ傘を持たねば濡れて帰れる

別離とは淋しき言葉 麗しき映画のようにいかぬこの世は

信号を待つ間に浮かべる歌一首渡り終えれば消えてしまぬ

父のフィールド (二) 鎌倉 高 畠 憲 子

父の机に作文用紙と辞書が載る施設に入りて三月の経てば

独房ぢやない書斎と思ふことにする 父が書き出す己が半生

白手ぬぐひだけは自分で手洗ひし窓に干しをり 父、戦中派

手ぬぐひを窓に干さむと転びたる老父の傷は打ち身・擦り傷

父の負ふ擦り傷一つも「ムスメサンだから」と知らせの電話が入る

「帰つたらやること」と施設の父が書く どこに帰るといふのだらうか

半生を綴りはじめしわが父の日課が途絶ゆ 友入院に

「訪ねてもゐないよ家に帰るから」施設の父から来る手紙には

海にふる雪

我孫子 丸 山 三枝子

秋高し青空ほんにみじかくて雨ふりきたり 今日獺祭忌

歌詠みの谷本朝江介護師の橋本さんを熱血少女と詠む

自が足で歩ける幸いかみしむる九十四歳おろそかならず

忽然と失せたる紙片をオロオロと捜しているなり歌のメモなり

電車にて忘れ来たりし夫の杖まだ見つからず夫は留守なり

手賀沼に沈む夕陽を見とどけて風吹くハケの水辺を帰る

穴水ののと鉄道を思いつつ千代田線にて揺られていたる

日本海に雪ふる季節 夜をこめて海にふる雪おもいて眠る

日が暮れて

東京 桜井 京子

立冬や誰も行かない小部屋あり日が差しやがて冷えてゆきたる

海べりにもどつて来たる冬の使者ミヤコドリなり名にし負ふ鳥

連れ合ひのゐない或る日を戻りたり家内どこも日が暮れてをり

風が来て荒地のススキがひと方に靡くは危ふしまた風が来つ

何でもいゝ絡みつきたい屁糞蔓ずつとあんと一緒に一緒がよくて

悪童が花壇を荒らしに来るだらうひ弱な花だよ民主主義つて

遠き日の誤解は誤解のままにありギンナン匂ふ小道を来たり

高層の窓にとどかぬ雨の音ふるとおもひて眠りに落ちる

作品一 十首選



(十二月号作品から)

桜井京子 選

・もう無駄な抵抗はせぬ吹き寄せる落葉を靴に踏みしめながら

千々和久幸

作者はこれまでの人生において、常に戦い続けてきた人である。

特に自分よりも権力のある上位者に対して、あるうにか闘志をむき出しにする人であった。また「常在戦場」とは、作者が好んで口にする座右の銘である。常に緊張感をもって事に当たろうとする心

構えは、常人の範疇を越えている。そんな作者が、年齢を重ねたとはいえ「もう無駄な抵抗はせぬ」などとは、にわかには信じがたい。いつものお得意の韜晦で読者を煙に巻こうとする意図と受け止めた

いが、下句の措辞はひそやかな苦悩をうかがわせて迫真性がある。とはいえ、乾いた落葉を踏みつつ行くその後姿は、ダンディズム

そのものであり、老いの悲哀とは異質な強靱さが窺える。

・腰痛で断念したるテニスだが母校のコートに立つ夢を見る

市川 義和

「血が騒ぐ」とタイトルのある連作の掉尾の作である。一連は、先ごろ行われたテニスのウインブルドン男子決勝の生中継を、深夜にテレビ観戦したことが歌われている。作者が学生時代にテニス部の

キャプテンであったことは知る人ぞ知るまぎれもない事実だが、テニス中継は作者の中に眠っていた青春を呼び覚ましたようだ。

腰痛で断念したとあるが、コートに白球を追っていた若き日の作者を彷彿とさせる歌である。「夢を見る」とあるのは、眠って見る夢というより、いつか再びコートに立ちたいとの願い。作者の青春の

日々の忘れ物が今もコートに息づいている気がする。

・「タクシーが、枯れているから歩こうか？」若者二人の会話がむず

い 江口 綱代

「タクシーが枯れている」と聞いて、一瞬たじろいだ作者。後に続く文脈から、タクシー乗り場にタクシーが来ていないことを意味するのだろう。「水が枯れる」という言い方もあるので、これもありか、と納得させられた歌である。今風の若者言葉の「枯れる」をネットで検索すると、押し活のアイドルのグッズが売り切れてなくなることを「枯れる」と言うのだとか。

他愛ない若者の会話に感心した作者だが、思わず「むずい」と即座に反応して口走ったところが可愛嬌である。

・電灯をつけつばなしで夫みえずメモひとつだに無きぞかなしき

大井田啓子

夫は明かりを点けたまま、いつたい何処に行ってしまったのか。

メモぐらい残しておいてくれたらいいのに、という眩きが下句の機智を引き出している。言わずと知れた太田道灌の山吹の歌「…実の」一つだになきぞ悲しき」のもじりである。

どこの家庭にもありそうな一面をウィットに切り取る技は、作者の得意とするところだが、この歌もなかなか楽しいではないか。この歌の後、どうなったかは歌われていないが、実際は結構心配し

て帰りを待っていたのかも知れない。

・微動だにできぬMRの中心に収まり耐えて駄作をひねる

近藤 光子

「圧迫骨折」とタイトルのある一連の中の一首。この場合の「MR」は「MR検査」のことで、治療のために体の断面像を撮影しようとするもの。四十分間動いてはいけないという歌もあり、この間はひたすらじっとしている他はない。

それにしても作者は、検査のさなかも短歌をひねっているというから、あっぱれな歌詠み根性。否、歌詠みは珍しい体験には飛びついてでも歌にしようとするもの。退屈している暇などないのだ。

・雨粒が路面に踊り消えてゆく個であることを捨てたのだろう

鈴木 順子

激しく路面に叩きつける無数の雨粒に目を凝らす作者。天から降ってくるひと粒ひと粒は「個」でありながら、地上に落ちたとたんに、一瞬で他と同化してしまふ。魅力的な暗喩の世界を予感させる。

雨粒を凝視する作者には、あくまでも「個」でありたいと希求する、強いこだわりがあるのだ。上句の巧みな措辞は、北の地でひとり短歌を作り続ける孤独な作者を彷彿とさせる。自己と厳しく向き合いながら、自己を見失うまいとする姿勢が尊い。

・まっさらになった顔して食卓にあなたが座る職退きし日に

中村かよ子

夫の退職は、妻にとっても日常が一変する一大事である。長年の勤めを終えた夫は晴れ晴れとしているが、はてさてこれからどんな日々が始まるのか。時間はたっぷりあり、一日中夫と向き合うのは、結構しんどいこともあるだろう。「新しい時計がそつと動き出す同じ

時刻に出す朝ごはん」という歌もあり、互いが暮らしの中でいい形で慣れていく他はないのだが。

・欠かさずに毎日飲んでいけれど味わったことはない常備薬

松沢みどり

欠かさず飲む常備薬とは胃薬、ビタミン剤の類いか。CMでよく見るサプリメントは栄養補助食品、つまり食品だから味わって摂るものとも言える。気休めなどと言えばメーカーから叱られようが、どうせ飲むならよく味わった方が効き目がありそうだ。せわしなく消耗戦のような日々の中、現役世代の厳しさを窺わせる歌である。

・定時には来られぬ人と言われても今となっては天性のもの

山中 光枝

約束の時間に遅れることが常態化して、仲間から非難されることもあったのだろう。自分で承知しながら治すことが出来ず、開き直りというより、ここまで来ればもはや透徹した境地である。

作者の「香蘭」入会は1959年、現役の会員として千々和代表に次ぐ最古参の会員である。ますますお元気で活躍して頂きたい。

・見たくない鬼を見たる日手賀沼の彼方に沈む夕日見にゆく

丸山三枝子

この世には鬼が居る、もしかしたら自分自身の中にも醜い鬼は棲んでいるかも知れぬ。出来ることなら会いたくはないが、会ってしまつた日は美しい夕日でも見て心を清めるしかない。

手賀沼の彼方に沈む夕日は作者を励まし、新たな勇気をくれただろうか。明日こそは鬼ではなく仏に出会える、そう信じた。

作品二、三 十首選



(十二月号作品から)

渡 辺 礼比子 選

〈作品二〉

・羽衣のとき巻雲まといたる露座の観音今朝は涼しげ

小笹岐美子

鎌倉といえは晶子の詠んだ長谷の大仏様が名高いが、大船駅西側の小高い丘の上に鎮座する露座の観音様も、長いこと地元民に親しまれてきた。通りすがりにたまたま目を上げた作者は、雲の羽衣を纏うその美しい姿に目を奪われたのだろう。毎日近くを通っているもなかなかこんな機会には恵まれない。日頃歌人としてのアンテナを張りつつ歩いているからこそその僥倖だったのではないか。結句の「涼しげ」には、作者の観音様に対する親近感も窺える。

・来る年は共に輪になりおどりたし われはリハビリひたすらはげむ

金子 幸子

デイサービスで開催された夏祭りを詠んだ連作の中の一。金魚掬い、たこ焼き、輪投げ、射的の屋台などで賑わうイベントを描いたあと、五首目にこの歌が置かれている。当時の作者は、体調不良で仲間の輪に入ることができず、楽しげな様子を外から見ている立場だったのだろう。切なさの滲む一首。全治を願って、リハビリに励む作者にエールを送りたい。

・「読みたい本どれでもお持ち」と孫に言ひ「うん大丈夫」と首を振らるる
高田みちる

現代の子供たちはなかなか気遣いが濃やかである。こちらの示す好意を辞退したい時、ぶっきらぼうに「いらない」などとは言わず、「大丈夫」と丁寧に断ってくることもある。筆者も知り合いの少女にお菓子をあげようとして「ダイジョウブ」といわれたことがあり、苦笑したものだった。

一方、同じ内容の文庫本であっても昭和期に発行されたものと今売られている本とは活字が異なるため、読み辛いと若い人には敬遠されるそう。電子書籍の利用率も、急激に伸びている昨今、あらゆる点で世代間ギャップはますます広がるばかりだ。人を喜ばせるためには時代に見合ったデリカシーがなくてはならないということなのだろう。

・満月の囁き声を聴きたくて耳をすませる十五夜の窓

田村 久美

作者は秋の澄んだ美しい月に出会ったのだろう。月を讃える歌は無数にあるが、視覚的な美が詠まれている歌がほとんどである。しかしこの一首は「満月の囁き声を聴きたくて」と月の美を聴覚で捉えようとする、その斬新な発想に驚かされる。作者が音楽家（現役のバイオリニスト）だからこそ生まれた一首といえよう。歌人には二種類あって、「耳の歌人」と「目の歌人」がいると聞いたことがあるが、まさに「耳の歌人」の傑作と読んだ。

・先ず日傘たたみていたりこの長き夏の出先の随所随処に

中井 房江

筆者も初夏の古都を散策していた折、次々にお目当ての場所を訪ねながら、なんだか折り畳み傘を広げたり畳んだりを永久に繰り返しているようなあとを感じたことがあった。傘というものは時代が変わってもあまり進歩も変化もない、不思議な道具だと思う。この一首、端正な詠みぶりから、装丁を丁寧に整えながら、傘をたたんでいる作者の優雅な仕草が目に浮かぶ。

・内視鏡手術を受ける卒寿の母いくつになりても初めてはあり

能城 春美

人生を知り尽くしたと思う年齢になって初めて、病に出会う人も少なくない。それまで何の不自由もなく、満ち足りた暮らしをしていたとしても、大方の人は人生の最後になって衰え、病を得て、病院のお世話になることになる。入院して物々しい医療機器に囲まれると、異世界へ放り込まれたような不安な気分になることもあるだろう。淡々と詠まれているが、下句には作者の人間洞察の鋭い目がある。三句の字余りが気になるので「母卒寿」としてもいいのではないか。

・ネタニヤフ、トランプ、プーチン、シユウ、ジョンウン悪い奴ほど丈夫に見える
柳沼きよ子

似たような発想の歌はあるかもしれない。しかし、この一首、固有名詞の並べ方、リズムのよさになかなか工夫が凝らされている。戦後民主主義の時代に教育を受けた私の世代は、憲法九条を暗記し、さらには、国連が平和と安全を守ってくれ、国際間で協力すれば、世界秩序は維持され、世の中は少しずつよくなるものと信じて大人になった。それがどうだろう。現実の世界は戦争が絶えず、この歌

のように世界の指導者と呼ばれるトップたちがみな「悪い奴」であつたとはい彼らに共通する「丈夫に見える」は、実に痛烈な批判である。

〈作品三〉

・暑い夏これで終りとなるだろう彼岸の中日いい雨となる

柏原 貞雄

厳しい暑さの夏であった。とりわけ、屋外で仕事をする人にとっては、いわゆる「命にかかわる危険な暑さ」の続く日々であった。この上句には農業に関わっている作者の素朴な願望が滲む。また、結句の「いい雨となる」という表現がいい。シンプルで味わい深い日本語と久々に再会した思いである。

・目を休めスマホもテレビも見ない日々障子の棧を念入りに拭く

佐伯 弥生

「白内障手術」という連作の中の一首。回復した目は幸か不幸か、これまで目につかなかった障子の棧の埃迄露わにしてしまった。家事が苦手な人なら「見なけりゃよかった」ですますところだが、この歌からは働きの作者が掃除に励んでいる姿が目には浮かぶ。

・コロナ禍の置き土産なり訃報さえ隠して済ます小さな葬儀

中島由美子

この歌の通り、コロナ禍以来家族葬が増え、多くの葬儀はこれまでと違って簡素なものとなった。こうしたあらたな葬儀の方法は、日本人の宗教観、人間関係など様々な価値観に変化を齎し、それはそれでよかったという意見も多い。しかし、「訃報さえ隠して」は余りにも寂しくはないか。ここに作者の批判的な視点がある。

村野次郎への旅（190）

昭和期の「香蘭」（二十五）

千々和 久幸

前号でお約束した通り「歌人の超然的態度の可否」の締め括りに村野次郎先生の意見を引いておこう。

○村野次郎

よい意味に於ける超然的態度は歌人にとつて必ずしも排すべきものではない。其人の進境につれてさうなつて行くべきが當然だとさへ思はれる。けれども歌人と云はる、人々のあるものは闘争力なく無氣力なるが爲一般文藝の競争場裡に入ることを得ずして、故意に超然的態度なるものをとつて居ることはないか。元より社會的に酬いられる、こと少なき短歌に於ては、所謂清貧を甘んじ得らる、人のみが携はるべきであり、其現狀に於ても泥まみれになつて生活の全部を其中に没入してゐる人の稀なるが爲超然的態度をとつてゐるやうに見えてゐるのではないかと思ふ。

わたし（筆者）には論旨のはつきりしない文章である。それはアンケートの主旨が何処にあるのか、初めから漠然としていたからである。だから案の定、回答はバラバラだった。個人個人が自由に問いを考え、それに従つて意見を開陳したという結果になった。

現にアンケートの回答をみな読み終えても、このテーマが何を期待し何処へ行くのか、さっぱり先が見えなかった。

もとより歌人が超然的な態度を取ろうが取るまいが、それは個人の趣味いや正確に言えれば品性、考え方、その場の問題であり、本人の自覚とは別に多くはそれを受け取る方がどう思うのか、の問題であらう。

よしんば一歌人の超然的な態度が社会や歌壇を害するといふのならともかく、そうでなければ傍からとやかく言うべき問題ではなからう。そんな態度が不遜に見えて癪に障ると

いふのなら、最初から無視すれば宜しかろう。そうではなくてその歌人の作品が進境著しく人格も又また円満で、ひとしく歌人の誰からも評価されているというのならその態度が超然的に見えたところで、何の差し障りもない筈である。

しかるに村野先生の締め括り（でなければならぬまい）意見は、ここに到つて振り出しに戻つてしまつてゐる。後講釈ではなくアンケートを取る時点で、問題の所在を明確にしておくべきだった。いやあるいはそのことは明言されていたのかも知れないが、誌面に断り書き（主旨の説明）はなかった。

「けれども歌人と云はる、人々のあるものは闘争力なく無氣力なるが爲めに一般文藝の競争場裡に入ることを得ずして、故意に超然的態度なるものをとつて居ることはないか。」はてさて難解な文章である。いったい歌人になせ、どこに「氣力」や「闘争力」が要るのか。そしてそれを前提にした「競争場裡に入る」とはどんな状態を指すのか。超然的態度はこの「競争場裡」から弾かれたゆえに故意にそうせざるを得ない、と読める。競争場

裡で競り負けたから態度で仕返しをしようとしても言うのであろうか。

この文章をわたしが翻訳すれば、「その歌人が氣力や闘争力が弱いために、（やむを得ず）超然的態度をとっている」となるが、これはお門違いというものであろう。

歌人の評価が作品ではなく、「氣力や闘争力」にあるというのは、不可解である。アンケートの中でこの文脈で回答した歌人（詩人）は一人もなかった。

締め括りの文章で難解な個所はまだある。

「元より社會的に酬いらるゝこと少なき短歌に於ては、所謂清貧を甘んじ得らるゝ人のみが携はるべきであり、其の現狀に於ても泥まみれになつて生活の全部を其中に没入さしてゐる人の稀なるが爲めに超然的態度をとつてゐるやうに見えてゐるのではないかと思ふ。」

回りくどい言い方だが、あつさり言つてしまえば、「武士は食わねど高楊枝」という環境が歌人に超然的態度を取らせている、と言いたいのであろうか。

なるほどそんな傾きはあろうが、これを一般論として普遍化するのは論理の飛躍である

う。それにしても不思議な文章である。

「所謂清貧に甘んじ得らるゝ人のみが携はるべきであり、其現狀に於ても泥まみれになつて生活の全部を其中に没入さしてゐる人の稀なるが爲めに超然的態度をとつてゐるやうに見えてゐるのではないかと思ふ。」

前提と結論が野合しているがごとき文章である。

「（短歌は）清貧に甘んじ得らるゝ人のみが携はるべき」は、生活苦に耐え得る人のみが短歌を詠むべきであり、という意味か。それは一面のみを見た経験的事実であり、この逆もあつて、一面のみの事実を全体的な議論として展開するからフェアでなくなる。

さらに「其現狀に於ても泥まみれになつて生活の全部を其中に没入さしてゐる人の稀なるが爲めに」は、「多くの歌人は生活の一部だけを短歌に差し向けている爲に」と読め、だから「超然的態度をとっているやうに見える」となる。これは議論の捻れであらう。

即ち「多くの歌人は生活の一部だけを短歌に没入しているから、超然的な態度を取つて居るやうに見える」と読んでしまふ。

この文脈からいけば「多くの歌人は生活の一部しか短歌に没入していないにも拘わらず（歌人だから）つねに超然的態度をとっているように見える」、（これは）おかしい現象である。歌人は世間の常識人とは雰囲気が違うと思われているが、それが外見上超然的と誤解されてしまふのではないか。もっと謙虚に世間の人と接するべきではあるまいか、とこの文章は言いたかつたのだらう。

歌人に超然的な態度（があるとすれば）その一面を、わたしは「武士は食わねど高楊枝」という擬態とよんだのだが、どうだろう。

村野先生の文章の解りにくさで随分遠回りをしてしまった。このアンケートの結果については、「香蘭」の内部でもまた言及があるかも知れない。あれだけ大がかりな企画をこのままで終わらせるのは勿体ない気もする。

それにしても人騒がせなアンケートだった。さて先を急がねばならぬ。

繰り返すがこのアンケートは質問の主旨が不明確であつたため尻切れとんぼになつてしまった。短歌論と歌人の態度の問題を同じ文脈で把握しようとすること自体が、無理筋だったのである。

覆された宝石

——歌誌「短歌人」の紹介（短歌雑誌連盟秋季総会にて）

歌誌「短歌人」2025年10月号は、同誌の1000号記念号として刊行されました。編集委員の一人である今井千草氏はその巻頭のエッセイ「1000号発行にあたり」の中で、こう自問自答されております。「『短歌人』の魅力は何であろうか。よく『おもちゃ箱をひっくり返したような』と例えられるような自由で一色に染まらないところであろうか」と。

わたしはそれは「おもちゃ箱」ではなく「宝石箱」であろうと直感しました。なぜならわたしは今井千草さんのエッセイから反射的に西脇順三郎の、あの高名な詩を思い出したからであります。その詩は（覆された宝石のやうな朝）何人か戸口にて誰かとささやく／それは神の生誕の日 というものであります。

ひっくり返したおもちゃ箱ならば、そこら辺りにおもちゃが散乱しているだけでしょうが、それが「覆された宝石」箱であつたなら、その宝石の一粒一粒が朝の光のもとに燦然とした光を放ち、それぞれが魅惑的な美しさに包まれて眩しく輝いておりましよう。

たとえばその一粒が永井陽子であり仙波龍英であり小中英之であり中地俊夫であり、現に歌壇のフロントランサーとして活躍中の小

池光、藤原龍一郎、今井千草、三井ゆき、川田由布子さんと多士済済、文字通り枚挙に遑がないという歌人集団の謂であります。

しからばこれほどの宝石がいや逸材がなにゆえに「短歌人」から輩出したかと言え、そこには優れたリーダーあるいはコーディネーターが居り、そして同時に逸材を生み出せる運営体制があつたという事でございましょう。

簡単に言えば「世に伯楽ありてしかる後に名馬あり」の例え通り、「短歌人」には優れた「目利き」が居り、同時に「名馬」を輩出する運営体制があつたということございましょう。その伯楽（目利き）が「短歌人」の〈中興の祖〉とも言べき高瀬一誌であり、蒔田さくら子という傑出したリーダーであつた、というのがわたしの意見であります。

いまひとつの運営体制について言えば、「短歌人」は（経験主義的徒弟制度）に拠らず、「作家の主体性を尊重」という運営であります。選者制度に拠らぬ編集委員制がそれです。

ざっと小歴を見ておきますと創刊は1939（昭14）、「心の花」の同人だった斎藤瀏が山川柳子、小宮良太郎らと新たに「短歌人」を創刊。従つて作歌理念は「心の花」の「深く、広く、おのがじしに」を継承しております。

先の高瀬一誌と蒔田さくら子は1952（昭27）に入会し、1962（昭37）年に小宮良太郎に代わり高瀬一誌が編集発行人になつて、今日の「短歌人」の基礎を築き上げました。

個人的なことを申し上げれば、高瀬、蒔田二両所とわたしは1971（昭46）に十月会に推薦を頂いて以来の、長いお付き合いでございます。あ、もう時間でですね、終わります。

一頁公論

(57)

正岡子規と鎌倉そして日蓮 続編

塩田 文子

12月号の「緑地帯」に「正岡子規と鎌倉そして日蓮」と題して書かせていただいた。最後に課題として

- ① 子規は日蓮にいつからどのような経過で心を寄せていったのか。
- ② そもそも日蓮宗とはどんな教えなのか。
- ③ 子規が文学者として前面に押し出されていったのはどうしてか。

素朴な疑問を私なりに紐解いていきたい。

- ① 子規は日蓮にいつからどのような経過で心を寄せていったのか。

幼少時より、小さな社など目立たない神様に手を合わす人だった。実家は禪宗であったが、仏教そのものが、日常生活に溶け込んでおり、仏壇に手を合わすことは、死の寸前まで続いた。ということから、神仏に触れる環

境が幼少時よりあったことがうかがわれる。

青年期には、政治家を目指したり、哲学に目覚めたり、詩歌を好んだりしたため、これらに関する書物をたくさん読んでいた。(その中でも『南総里見八犬伝』は好きなどころを暗記もしていたという。)

直接に日蓮を意識したのは、夏目漱石が房総の旅行記『木屑録』を子規に送ったものを見てからに思われる。この旅行記から房総が舞台の『南総里見八犬伝』を記憶の底から思い出したかもしれない。誕生寺の由来、海と岩の関わり合う風景を読み、そこで日蓮の偉大さを知ったかもしれない。このころ子規は鬱憂病を払拭しようとの思いもあり、房総への旅立ちを決意したのだろう。「かくれみの」に「誕生寺は剣山を背い、大海に望む。天の英雄を生むは、あに偶然ならんや」との記述がある。房総の体験から日蓮にのめりこんでいった。鎌倉への旅もその一環で日蓮をもっと知りたいとの思いに違いない。因みに、鎌倉には、日蓮宗の寺が一番多いそうだ。

私も若いころ誕生寺に詣でた。といつても、単なる観光旅行で、「大きな寺だ」ぐらいの記憶だ、ただ、漁港近くに大きな鯛が群れを成

し、ひしめき合っているのを見て大変驚いた、だれも獲らないという。それが日蓮と関係していることを、今、改めて知った。

子規は何度も法難に遭いながらもくじけず、法華経の教えをひろめ、国家(幕府)に対しても、おかしいとはおかしい、と建白書を渡すなど、堂々と生きた日蓮をどう思ったのだろうか。

司馬遼太郎の『坂の上の雲』で、子規に次のように言わせている。「あしは宗教には無関心じやが、好きな宗祖は誰ぞと聞かれれば、そりや日蓮ぞな」や、「日蓮のあのかつかとのぼせているところが、あしは好きぞな」というセリフのところである。

その後、子規は日蓮を讃仰者とし、日蓮の法難を自らの病氣と結び付けて、文学上の改革をつぎつぎ成し遂げていったことは、誰もが知るところである。

・日蓮を埋めし山に風は吹けどこしへにてらす法のともし火

子規は、日蓮の遺徳が風化することなく永遠に人々の心に灯りつづけることを願ったのだろう。②③については、紙幅が尽きたため、またの機会に書くこととする。